

(笠沙町上ノ島)

位置と環境

枕崎の南西沖、約90kmの所に上ノ島・下ノ島を主体とし、小島まで合わすと30を越す島々からなる草垣群島がある。このなかで最も東北側にあり、最も大きな島が上ノ島である。周囲は4kmたらず、最高点158mで、周囲は絶壁の孤島である。

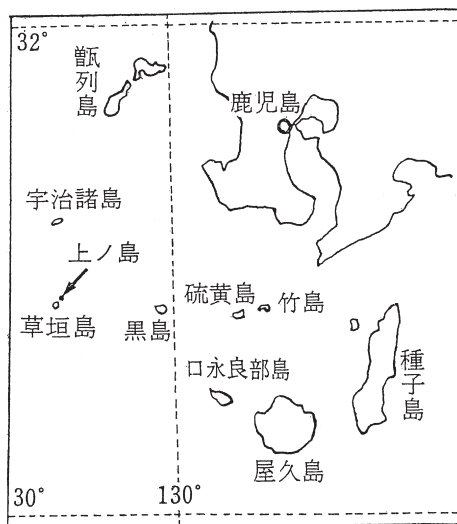
調査の経緯

昭和46年（1971）から翌年にかけて、ここに草垣島灯台専用のヘリポートが建設され、灯台の西南側150mの所が削平されたが、その際に多くの土器、石器などが採集されている。

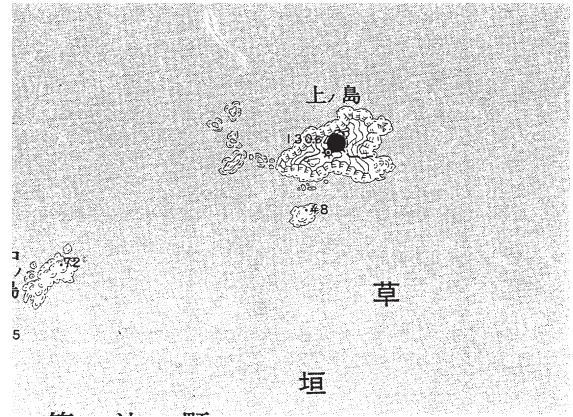
遺構と遺物

採集された土器には、縄文土器、弥生土器、須恵器などがある。

縄文土器は、前期、中期、晩期のものである。小破片のみで風化が激しく、器面は内外ともに剥落、ひび割れが目立つ。前期の土器には轟式、曾畑式土器がある。轟式土器は、三条以上の横方向凹線を巡らすものだが、この凹線の中には先端の角ばったヘラによる連続した爪形文が描かれている。口唇部には刻み目が施されている。曾畑式土器は、ヘラによる太めの平行直線・曲線文、幾何学文が施される。縦方向の短い平行沈線の上に突帯が付けられたもの



第1図 草垣上ノ島の位置



第2図 上ノ島（草垣諸島）遺跡の位置

もある。中期の土器は使用する土の中に滑石を含んでおり、竹管文を連続施文したものである。阿高式土器と思われる。晩期の土器は口縁部が肥厚し、ここに横方向の凹線と、その間に弧状の凹線がみられる。

弥生土器には、口縁部に細いヘラ描きによる綾杉状沈線文が施された甕と、肩の部分に一条～二条の沈線文を巡らした壺がある。これは前期のものと思われる。

須恵器の壺が一点出土している。口縁部が外へ反って、底部が平底で、最大径は肩の部分にある。破片のなかには把手状のものが付いていた痕跡のあるものがあり、肩の部分に突起が付いていた可能性もある。外面には条痕タタキがあり、内面には指やハケで撫でた痕が残っている。また、表面に深く入り込んだ靱痕が残っている。灰色をしており、焼成は良く硬い。器形からして9世紀ころのものと思われる。

石器は石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、凹石、叩石、石錘、砥石などが出土しているが、そのほかにこの島に産しない黒曜石の破片が多く採集されている。

石鏃は、頁岩や黒曜石製のものが三点以上採集されている。二等辺三角形の形をしてえぐりの深いもの、二等辺三角形をして底部がまっすぐしたもの、正三角形をしてえぐりも直線的なもの三種類がある。

石匙は、剥片の一部のみに簡単な加工をしただけの縦形石さじで大きいものである。

打製石斧は、ばち形をしたもの、靴形のものなどいろいろな形がある。

磨製石斧は、砂岩などを原料として刃部と両側面のみを磨いた局部磨製のものや、丁寧に両面を磨いた太めのもの、バチ形のもの、ややえぐりのあるものなど種類は多い。

凹石は、丸い礫の中央が窪んでおり、周辺に欠損の見えることから叩石としても使われたことが分かる。

叩石は、円形あるいは楕円形をした砂岩、花崗岩製のもの11個が採集されている。

石錘には自然面を残す安山岩礫の両方にひもかけを作ったものと、砂岩の自然礫の両側を打ち欠いたものがある。

半透明の淡緑色をした翡翠製の珞状耳飾も出土している。外周が鋭く尖った楕円形のもので、半分欠けている。長さ6.6cm、幅4.5cm、厚さ0.7cmで、珞状耳飾としては大型である。欠けたあと再び垂飾りとして使用したらしく、両面から穿孔した二個の孔がみられる。

特徴

珞状耳飾は、民俗例から孔をあけた耳たぶに切れ目を下にして挿入した装身具であると考えられている。丸くて扁平な石などの中央に孔をあけ、この孔まで一条の切れ目を付けている。アジア各地でも類例がみられ、日本では縄文時代前期の遺跡から多く出ている。九州でも前期の轟式土器に伴って出ることが最も多い。その分布をしてみると南九州に集中している。昭和56年（1981）に上田耕が集成した資料では、九州の出土遺跡は23か所であるが、そのうち鹿児島県では11遺跡とその半数を占めている。平成元年に本田道輝が報告したところでは、鹿児島県での出土遺跡数は14に増えており、九州各県でも同様に増加していることが予想できるが、その割合はそんなに変わらないものと思われる。

こうしたなかで上ノ島の例は日本における最南端の出土例であり、石材として翡翠を使っていることは注目してよい。日本における翡翠の産地は新潟県系川周辺が知られている。県内では加世田市上加世田遺跡や、西之表市泉川遺跡などで翡翠製品が出て

いるが、このような出土例は当時の交易の広さを物語っている。上ノ島の例も、その形態、大きさなどが九州各地の例に比べれば異なっており、北陸周辺からの持ち込みの可能性は大きい。

石斧の中には、素材の石から剥ぎ取っただけのものに簡単な加工をただけのものが多いのは、南九州本土との様相と異なり、種子島辺りとの関連性を物語っている。

上ノ島遺跡は、こうした周辺との交流といった問題だけでなく、漁撈生活以外に振ることのできないこのような小島に、断続的ではあるが、なぜ人が長期にわたって訪れたのかという興味ある課題を残している。

資料の所在

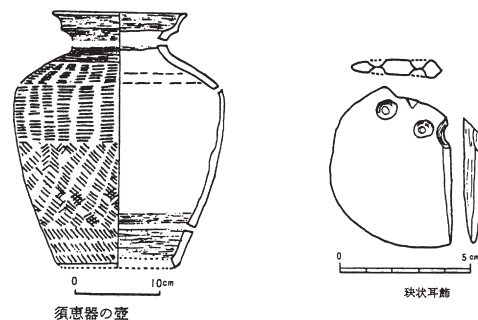
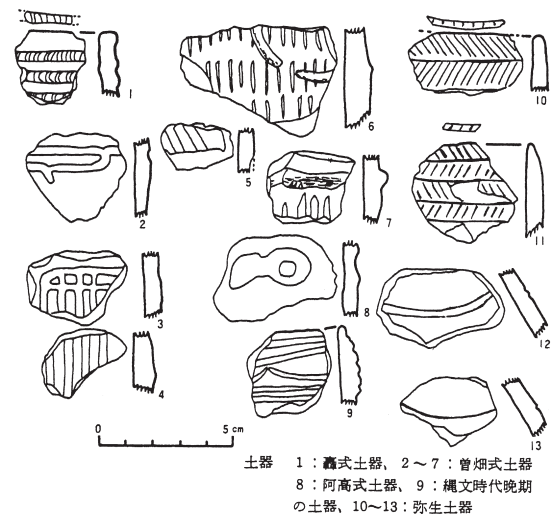
出土遺物は枕崎市立図書館に展示・収蔵されている。

参考文献

河口貞徳1972「鹿児島県草垣上ノ島の遺跡」『考古学ジャーナル』No.66

上田耕1998「九州発見の珞状耳飾」『東亜玉器』

(前村真次)



第3図 採集遺物